
【二次創作】七式探偵七重家網・番外編

牧村サヤ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

【二次創作】七式探偵七重家綱・番外編

【コード】

N3040BA

【作者名】

牧村サヤ

【あらすじ】

強敵ゆっしんのシクルさん (<http://mypage.syosetu.com/21735/>) の作品である「七式探偵七重家綱」 (<http://ncode.syosetu.com/n76980/>) の二次創作小説を書かせて頂きました。なお、許可等は正式に頂いています。原作が好きだという方、原作をまだ読んでないという方も、お付き合いして頂けるならこの上ない喜びです。

FILE・etc 「如月茉莉 上」(前書き)

・本小説は、前述した小説の『FILE10 星川美々 下』
までのネタを含んでいます。

まだ読まれていない方、これから読むつもりの方にはネタバレ
になりますので、そちらを先にどうぞ。

原作を知らなくてもある程度は楽しめるようにある程度は配慮
しましたが、原作を読んでからだ面白さが倍増するかもしれませ
ん。

・原作に書かれている設定を一部纏めていますが、あくまで文章
を整えるための一要素にすぎません。詳しい設定を知りたい方は、
原作をお読みください。

・ミステリ成分が全くありません。番外編という事で勘弁してく
ださい。

・原作のキャラ設定等を大事にしたい方には閲覧をおすすめしま
せん。特に由乃ちゃん・纏さんのファンの方はご容赦ください。

・私の小説の面白さは全く保証できません。ただし原作の面白さ
は保証させていただきます。

「すいませーん。貴方が神無月って占い師ですか？」

はい。お客さんですか？

「そうです。仲の良い友達から、貴方の占いは当たるって聞いたんですけど？」

はは。まあ僕が占っている訳ではないですし、厳密には占いと言っていいのかも分かりませんがね。

「コウレイジユツってヤツですよ。お幾らですか？」

1000円になります。で、どなたの霊を呼ばせて頂いたらいいのでしょうか？」

「私のカレが浮気をして戻って来たんですけど、どうしたらいいんですかね？」

つまり、その方をお呼びすればいいと？

「貴方の占いって、その人のセンザイシキってヤツを呼び出すだけだから、嘘も吐かないし呼び出された本人も気付かないって聞いてきたんですけど、本当なんですか？」

はい。だからやろうと思えば、貴方自身と会話する事も出来ますよ？」

「私、自分の事くらい分かっていますから、大丈夫です」

それは申し訳ありません。では。

「 霊能力者？」

ボク わんどの和登由乃は首を傾げながら、来客用のソファに座る依頼

者 かづき如月茉莉と名乗る少女にそう尋ねた。

「はい。何でもレベルA級の能力者らしくて、死んだ人間の魂を呼び出して自分の肉体に憑依させる事が出来るらしいんです」

と、如月さんは言った。

彼女はボクと同じ十六歳で、とある事情で高校にも通わず、この七重探偵事務所という小さな探偵事務所に住み込みの探偵助手として働いているボクとは違い、近くの高校に通っている普通の女子高生らしい。背丈や体躯はほとんどボクと同じくらいで、高校生にしては少々小柄で華奢な少女だが、何だあの乳は。メロンでも詰めているのか。

「……和登、さん？」

如月さんは不審そうな表情を浮かべ、ボクの顔を覗き込んで来た。「な、なんでもありません。続けて下さい」

ボクは少々顔を赤らめ、如月さんの胸から視線を逸らして言った。どうやら学校の帰りらしく、黒い厚めの布で出来た制服を纏っている如月さんだが、その上からはつきりと丸い乳のラインが見える。これでも一応巷ではそれなりの知名度がある探偵、七重家綱の探偵助手をやっているボクだ。犯人、特に女性の犯人が凶器を隠し持っているかもしれない胸に関しては少々五月蠅いのである。だから断言出来る。この乳はモノホンだと。パッドは使っていないと。「で、では」

如月さんはボクが出したコーヒーを啜りながらゆっくりと話し始めた。

彼女の話 요약すると、どうやら彼女の高校で最近話題になっている、降霊術を行って占いをする凄腕の霊能力者がいるらしい。「で、私も仲の良い友達と一緒に、その方のお店に行っただんです」

いかにもありそうな話だ。ボクも、あのまま和登家に居たままならば、依頼人が来たというのに競馬で大負けしたと言って奥で不貞寝しているふざけた探偵、七重家綱ななえいえつなと出会わなければ、そんな事をしていたのかもしれない。

「そして友達の番が終わって、いよいよ私の番になったんです」
そこまで言うと、如月さんはやや悲しみに満ちた表情を露わにした。

「私の両親は、私が幼い頃に離婚して、私は父に引き取られる事になったんです」

この事を悲しんでいる 訳ではないのだろう。そのくらいはボクにも分かる。如月さんは続けて言った。

「そして母とはその時から全く会っておらず、連絡も取れないのですが、その母と久しぶりに会話してみたいと思って、私はその霊能力者に母の魂を呼び出してもらったんです」

これもまたありそうな話だ。なかなか会えない身内と会話する。一般的な女子高生としてはあまりに普通の回答である。そんなプロファイリング風の考察を適当に行いながら、ボクは如月さんの話に耳を傾けた。

「内容は……まあ、茉莉も元気にやっているか、高校には通っているか、と取り留めの会話をしただけで終わったのですが、その中の一つ、気になる事があったんです」

この気になる事とやらが、彼女の見せる悲痛な表情の原因らしい。「気になる事、というと？」

ボクは少し身を乗り出しながら、如月さんに話を促した。

「……はい。最後に母は、茉莉がいないと寂しいから一度くらい遊びにおいで、と言ってきたのですが、その時私は何も思わなかったんです」

確かに ボクも特に何も思わない。離婚したとはいえ、自分の腹を痛めて生んだ子だ。その程度の情は湧いても別に不思議は無いだろう。

「で、その後家に帰ったのですが、その晩、父から信じられない事を聞いたんです」

「信じられない事、ですか」

信じられない事とは何だろう。『実はお前は桃から生まれた』と

か、『実はお前のお母さんはハター・ハターのジンよろしく、世界中を逃げ回っている』とかだろうか。って、どうも今日はテンションが変だ。

「はい。父は『今朝、母さんが事故で亡くなったそうだ』って私に言ったんです」

事故で亡くなった？ しかしまあ、ボクは死者の魂を自由に呼び出せる女性を一人知っている。この人曰くそれはレベルB級の能力らしいから、レベルA級の能力者ならばそれ以上の事を出来ても不思議は無いが。

「……それは、お悔やみ申し上げます。しかし元々降霊術とは、その対象者の生死を問わないはずですが？」

一応その人 纏まとさんは死者の魂しか降霊する事が出来ないらしいが、本来の意味での降霊術は生霊であっても可能だという話は聞いた事がある。

「そんな事は分かっています。でもだからこそ、なんです」と、いうと？」

イマイチ如月さんの話が見えてこない。

「つまり私が母と会話した時、母は既に亡くなっていた事になりますよね？」

まあ、その情報が正しいならそうだろう。

「……そう、でしょうね。診断書を見ていないので、断定は出来ませんが」

如月さんは同意して軽く頷くと、さらに続けて言った。

「だったら、母が言った最後の言葉は、どういう意味なのでしょうか？」

「どういう意味、ですか。単に葬式に出て欲しいという事ではないのでしょうか？」

「確かに、そうかもしれません。でも、こっちは考えられませんか？」

そう言つと如月さんは、自分の中に溜め込んでいたものを吐き出す様に呟いた。

「私に、死んで欲しいと」

「はい？」

そんな如月さんの意外な言葉を聞いたボクは、思わず素っ頓狂な声を上げた。

「そ、それは、如月さんの考え過ぎじゃないかと思えますけど」

言われてみれば確かにそう取れなくもないが　それは流石に杞憂だろう。

「勿論、私の思い過ぎしなのかもしれませんが、またその霊能力者の方に占ってもらおう勇気が出ないのです。どうかお願い出来ませんか？」

そう言って、如月さんが視線を落とした瞬間だった。

「で、どうしてそんな事を俺に？　お嬢さん」

如月さんの反対側のソファに腰掛けていたボクの背後に、何時の間にか奥の部屋で不貞寝していた筈の家綱が立っていた。そして無意味にキメ顔を作りながら、如月さんの目を盗んでチラチラと胸元を見ている。やっぱりコイツは重度のアホだ。

「え、ええ。歌手の星川美々さんが、ここに星川真美さんの亡霊騒動の解決を依頼したって話を耳にしたので、こういう事には詳しいのではと思ひまして」

突然現れて自分にキメ顔を向けてくる家綱に、如月さんは戸惑いながら言った。

やはり星川美々さんの一件は、ここ最近の知名度向上に貢献しているらしい。

「成程、分かりました。ではお嬢さんの心が一刻も早く平安を取り戻せるよう、この町の頼れる名探偵　七重家綱が迅速に、貴女の愁いを晴らして差し上げましょう」

「……………」

胸に手を当ててドヤ顔を決めるアホに対して、ボクは溜め息を吐く事しか出来なかった。

「もう、浮気はしないのね？」

『本当にあれはただの出来心で、俺が一番大切なのは君だけだ』

「……分かったわよ」

「すみません。もう時間切れみたいです。ここから先は別料金になります。どうぞ致しましょう？」

「もう十分よ。貴方、なかなか腕の良い占い師ね」

「それはありがとうございます。」

「また、悩み事があったら来るかもしれないわ」

「それでは、今後とも御贖に。」

「やれやれ。誰が何を言っても結論を変えるつもりが無い問いに、貴重な金と時間を注ぎ込む感覚だけは、この僕にも全く理解し難い。」

「話は聞かせてもらったわ。茉莉ちゃん」

「……は、はい？」

「突如家綱を中心に発生した閃光でボクと如月さんの目が眩んでいる間に、家綱は巫女装束を纏った女性に変化していた。」

「ストレスはお肌の天敵よ。女の子なんだから、そういう事には気を付けないと。ね？」

「は、はあ……」

「うふふ」

「そう言っただけで女性が如月さんに伸ばした白く美しい手を、ボクは慌てて掴んだ。」

「何かしら、由乃ちゃん？」

「……纏さん。依頼者に手を出す事だけは、やめてもらえませんか」
「?????」

纏、というのがこの女性の名前だ。大和撫子を思わせる様な黒い艶やかな髪が特徴で、前髪だけは目の上で綺麗に切り揃えてある。猫のような悪戯っぽさと気の強さを連想させる吊り目が特徴の、全体的に目鼻立ちが整った美しい女性である。

彼女は七つの人格を持つ多重人格者 七重家綱が持つ人格の一つだ。多重人格者というだけでもそうそういないのだが、その中でも家綱は人格と一緒に身体まで変わってしまう超特殊体質なのだ。勿論身体が変わるといっても、服装まで変わる訳ではない。その為家綱が愛用しているのが、携帯型の瞬間服装変更装置「クロスチェンジャー」だ。さっきの閃光は、それが使用された時に放たれたものである。

もともと本人は、その異常な体質を超能力として認識していないが おそらくレベルBかレベルA級の能力だ。

「だったら……私のスキンシップは、由乃ちゃんが解消してくれるの？」

纏さんはそう言うと、ボクが掴んでいない方の手でボクの身体を艶めかしく撫で始めた。

「ちよ、ちよっと、纏さん!? 後に、後にしてください……っ」

そして先程からの言動で分かる通り 彼女はレスビアンである。彼女は自分のお眼鏡に叶った女性、特に年下の人にはつついし手を出してしまう悪い癖がある為、ボクは彼女にセクハラ紛い、いやセクハラを受けながらも、彼女の魔手から無関係な人を守らなければならぬのだ。

「そ、そういう関係なんですか……?」

そんなボクと纏さんの様子を見て、如月さんは顔を真っ赤にして呟いた。

「ち、違います……って、ひゃわっ!？」

纏さんのひんやりした指を下着の中に入れられて、ボクは思わず

変な声を上げた。

「『まだまだお前さんの歳は、ワシが土佐藩を脱藩した時と大して変わらんぜよ。お前さんはまだまだこれから人間じゃ。これからの頑張り次第では、ワシが洗濯しきれんかった日本を洗濯するのはお前さんかもしれんぞ?』」

「は、はい！ 坂本先生！」

「『じゃからワシの事は竜馬でいいと……ん?』」

「 すいません。時間切れみたいです」

「そ、そうですか」

「次の方もおられますので、また今度という事で」

「……分かりました。また何かあったら、相談に来ます」

「お待ちしております」

「 では次の方、どうぞ」

「はい」

古びた神社の中にポツンと建てられている小屋に辿り着いたボクはそう言つと、先程まで占って貰っていた若い男性が出てきた暖簾を潜り抜け、その占い師の顔を見た。

時間は日の入り頃。もう時間も遅いからか、ボク達を除けば人の姿は無い。

その占い師 神無月さんの外見は二十歳前後で、全体的に華奢で線の細い男性だ。

燕尾服の上から黒いコートを纏っていて、右目に銀縁の年代物らしいモノクル眼鏡を掛けているその姿は、いかにも占い師という感じである。もつとも、神無月さんは単に執事のコスプレをする趣味があるだけなのかもしれないけど。

「どうぞ、お掛け下さい」

どうやら元々この小屋は小さな茶店として建てられていたらしく、中は七重探偵事務所よりも狭いものの、造りはそれなりに立派なお座敷になっている。

こんな所で古い店を営業できるといふ事は、神無月さんはこの神社の神主さんと何らかの関係があるのだろうか。

「失礼します」

その一番奥にある特等席に一つだけ置かれた座布団　ちようど神無月さんが座っている反対側の席にボクは座った。
「どうも」

神無月さんは客であるボクの緊張を少しでも解くためなのか、にこやかな笑顔を浮かべているが、あくまで社交辞令ですよといった感じで、目は笑っていない。

纏さんと如月さんは、外の少し離れた場所で待機している。

纏さん曰く、十中八九この人は偽物らしい。

神無月さんの降霊術　纏さんが降霊後に失神してしまう様な反動も無く、纏さんが霊を呼び出す為に必要としている対象者の想いが込められた物も要らない降霊術なんて、レベルA級の能力者といえども考えられないらしい。

その為、纏さんの見立てによると、神無月さんは特殊な話術と卓越した観察力・洞察力で自分の言う事を信じさせる高等技術　コールド・リーディングか、相手に大量の多解釈で難解な情報を流し、その中で当たったいくつかの情報を基に全ての情報を改竄して、自分の意見が完全的中したかの様に見せかける高等技術　シヨットガニングの使い手の可能性が高いらしい。これにある程度のもれらしく見せる超能力が加われば、常人ではまず騙されるという事である。

もつとも、そこへ向かう途中ボクはこっさり纏さん自身が降霊術をすればあっさり解決するのではないかと言ったのだが、一応最悪の場合を考えて、神無月さんが如月さんから引き出した情報を得ておいた方が良かったらうという話だ。

「では、どなたの霊を降ろしてみましようか？」

「その前に一つ、神無月さんが呼び出せる人に条件はあるんですか？」

ボクがそう言うと、神無月さんの目が僅かに笑った。

「そうですね。基本的に僕の降霊術は、貴女が呼び出したい人を思う気持ちを媒介にしてその人の霊を呼び出すので、貴女が殆ど知らない、あるいは全く興味が無い人は呼び出せない可能性が高いです」「なるほど……」

神無月さんの呼び出す条件は、確かに纏さんの降霊術と比べても、その根本においてはそれなりに似通っている。一応は霊能力者の研究もしているという事だろうか。

「あと、呼び出す御方に貴女と会話出来る程度には肉体の使用権を渡しますが、僕自身への負担軽減の為に主導権自体は僕が握っているんで、筆跡鑑定なんかは厳しいかもしれないですね」

神無月さんはボクの反応を伺いながら言った。事前に纏さんの助言が無ければ、ボクは神無月さんを本物だと思い込んでしまっても不思議はないくらい、彼が実際に降霊術を行っていると思せかける為の巧妙な予防線を張っている事が分かった。実際に纏さんという本物の霊能力者を知っているボクでさえこうなのだから、他の人に神無月さんが偽物の霊能力者であると見破る事は難しいだろう。

「なるほど。だったらそうですね。この街で私立探偵をしている、七重家綱ななえいえつなという方をお願いします」

神無月さんのボクを引き出す為の方法は、極めて単純である。

七重家綱。この摩訶不思議で奇妙奇天烈な存在である彼を再現するのは不可能だろう。勿論、神無月さんがある程度家綱の事を知っているとは思議ではないが、六つの人格全てを模倣するのは流石に無理がある。何せ全ての人格と対話した事があるのは、家綱本人も含めてボクしか存在しないのだから。

つまりボクが神無月さんのミスを発見し、その後で纏さんつまり七重家綱本人に登場してもらい、その超能力は偽物であると証

明してしまえばいいのである。

「はい。わかりました」

そう言うと神無月さんの目が僅かに光を放った。

そして神無月さんはその鈍く光る目でボクの頭の中を　その中に存在する七重家綱を射抜く様な視線を向けてきた。

「ふむ、これは　何と言ったら良いのか。いや。七重家綱さんは、六つの人格を持つ多重人格者、ですね？」

「は……はい！？」

ボクは神無月さんに何を言われても動じない様に身構えていたが、その思いがけない一言で思わずビクンと反応してしまった。慌ててもないかのように繕ってみたものの、その動揺は隠しきれないまさか家綱自身、あるいは家綱を呼び出してみたいという人が現れる事を予期していたのだろうか。

「いやいや、こんな人は初めて見ました。一体どういう能力者なんでしょうね？」

「さ、さあ、ボクもよく分かりませんが……」

完全に出鼻を挫かれてしまったボクは、言葉を濁してしまった。

「僕の目には彼　彼女の魂が六つに色分けされているのが見えるのですが。いや、厳密には一つだけ他の魂よりもやや大きいかな？」

この人格が彼の主人格　七重家綱さんですかね。で、これを呼び出せばいいんですか？」

「え、えーっと、あの……」

正直こうなる展開は全く予想していなかった為、咄嗟に神無月さんの問いに対して答えを返せない。

「ああ、どうせなら全員交代交代で呼んでみましょうか？」

「えっ？　あ、はい。そうですね。そうしてください」

ボクは動揺を必死に抑えながら、神無月さんの提案に頷いた。

「では、六人分で六千円になります」

「ろ、六千円？」

今は確か三千円くらいしか持っていない。しかし家綱と財布を共

有している纏さんはさっきの競馬で全てスツてしまっているらしいので当然無一文だし、まさか如月さんに払ってもらう訳にもいかない。どうしよう。

「はは、冗談ですよ。一応一人の方ですし、千円にしておきますね」

「あ、ありがとうございます」

「では、一人目の方 家綱さんから始めましょうか」

「は、はい」

神無月さんの嘘を見破るところか、反対に気を使われてしまったボクは、神無月さんが演じているはずの六つの人格 家綱、葛葉さん、アントン、晴義、ロザリー、纏さんとそれぞれ本来ボクかその人格しか知り得ないはずの情報を彼方此方に散りばめた世間話を始めたものの、その外見や声が神無月さんのものである事を除けば、特に矛盾点を見つける事が出来なかった。

「で、結局何もおかしな事は見つからなかったの？ 由乃ちゃん」

「その、はずだったんですが」

その神社の鳥居で待っていた纏さんと如月さん（案の定、纏さんは如月さんに手を出し掛けていた）に合流したボクは、神無月さんと神無月さんが演じているはずの家綱達六人とボクが交わした会話の内容を伝えた。

「なるほど。どうやらその神無月さんは、思った以上に厄介な相手みたいね」

「……はい。でも神無月さんは、本当に本物の霊能力者なんじゃないですかね？ 纏さんも含めた六つ全ての人格を再現できるなんて正直それ以外には考えられないですし」

「ふふ。六つ全て、ね……」

纏さんは謎めいた笑みを浮かべてそう呟くと、不安そうな顔を浮かべているボクと如月さんの顔を見てあっさりと言った。

「じゃあ、そろそろ行きましようか。この私が、貴女達二人に本物と偽物の違いを教えてあげるわね」

「……やれやれ、今日はこれで終わりですかね」

「じゃあ最後に、ちよつと私を見て貰いましょうか」

小屋の中から出て戸締りをしていた神無月さんを見据えると、纏さんは悪戯っぽく言い放った。

「ああ、すみません。そろそろ帰らないと用事が、いや」

神無月さんは巫女服姿の纏さんを目に止めると、神無月さんは自分と同類の匂いを嗅ぎ取った獣の様な表情を浮かべて僅かに笑った。「なるほど。貴女が　貴方が七重家綱ですか。いいでしょう。で、誰との会話がお望みでしょうか？」

纏さんはそんな神無月さんの笑みに一步も引かず、挑発的な微笑みを浮かべた。

「そうね。神無月さん、貴方自身とお話してみたいわ」

「構いませんよ。僕も一度、七重家綱さんとお話してみたかったですし」

そう言つと神無月さんは、再び小屋の鍵を開けてボク達を手招きした。

「しかし、貴方　」

神無月さんに先導されるまま、優雅な雰囲気（霧）で小屋の中へ入った纏さんは神無月さんの服装、そして顔をチラリと見ると

「巫女さんじゃ、ないのね……」

深々と溜め息を吐いた。

「……」

ボク、如月さん、そして神無月さんまでもが　反応に困った。

「どうぞ、ご自由にお座り下さい」

ボクと如月さん、そして纏さんの三人は、神無月さんが占い師をしている小屋に足を踏み入れた。ボクと如月さんが此処に入るのは二回目で、纏さんは一回目なのだが、纏さんはさしてこの小屋の内装に興味は無さそうである。

今回の主役である纏さんは一番奥にある特等席の座布団に、今回は脇役 もとい観客であるボクと如月さんは、少し離れた場所に置かれた椅子に座った。

「では、新しくお茶を入れ直させてもらいますね」

神無月さんはそう言いながら、座敷の一番奥にある箆笥の中から茶葉の入っている缶を取り出し、その中身を一摘み、二摘みと急須に入れると、すっかり火が落ちているストーブの上に置かれていた薬缶のお湯を注いだ。

「いや、七重家綱、いえ、今は纏さんでしたっけ。僕は貴女の大ファンなんですよ。この街の頼れる名探偵。実に格好良いじゃないですか。想像していた以上ですよ」

神無月さんのテンションは傍目にも高い。

「ここ最近だけでも麻薬密売組織の壊滅、共生会会長の暗殺未遂事件、星川真美さんの亡霊騒動等々、超能力者対策があまり進んでいない警察を尻目に、そういった超能力者達による凶悪犯罪を次々と解決に導いている。実に素晴らしい事です」

そう言うつと神無月さんはお盆に湯気の立った緑茶と饅頭を乗せ、まずは纏さん、そして次にボクと如月さんにそれらを配った。

「少々お湯が温くなっていたので、あえて玉露にしてみました。遠慮無くどうぞ」

そう笑みを浮かべた神無月さんに対して、ボクと如月さんはその緑茶と饅頭に手を付ける事を躊躇してしまっただが、纏さんは平然と

それらを口にした。

「確かに、玉露は高温のお湯で淹れると苦み成分を抽出してしまう事が多いから、この位のお湯が適温かもしれないわね。貴方、なかなか良い仕事をしているわね……」

「名探偵のお褒めに預かり、誠に光栄でございます」

纏さんの賛辞に深々と頭を下げる神無月さんの態度は、完全に執事のそれである。

そしてそんな纏さんと神無月さんの様子を見たボクと如月さんも目の前に置かれた緑茶と饅頭に手を付けたが、確かに纏さんの言うようにどちらも美味しい。

「和登さん、これどっちも美味しいですね」

「うん、そうだね」

個人的には、緑茶と一番合うのはカロリーメイト（メイプル味）なんだけど。

「それは嬉しいかぎりです」

そう言っつて神無月さんが纏さんの向かい側に置かれた座布団に腰を下ろすと、纏さんはその口をゆっくりと開いた。

「では、そろそろ始めましょうか」

そして 告げた。

「結論から言えば、貴方の降霊術は偽物ね？」

纏さんにそう言われた神無月さんは、呆気に取られた様な顔を浮かべて言った。

「偽物……ですか。では、容疑者として月並みな事を言わせてもらいましょうか。証拠は何でしょう？」

「まあ、探偵である前に一人の霊能力者である私としては、貴方の降霊術から霊的なものを何も感じなかったと言ってもいいのだけど、それでは貴方も納得しないわよね……？」

「勿論です。もし貴女が本物の霊能力者だとしても、霊能力者が他の霊能力者の力を必ず感知出来るというデータが無い以上、それは証拠にならないでしょう？」

「ええ。だから貴方が偽物だと証明する為には、誰でも貴方が偽物だと分かる決定的な証拠が必要ね」

「では、その証拠はあるんですか？」

「証拠はまだ無いわ。でも貴方が私の実験に付き合ってくれれば、貴方が偽物だという証拠が間違い無く見つかるわよ」

「……どんな実験でしょうか？」

「由乃ちゃん。紙とペンを貸してくれる？」

そう言っただけの方を見てきた纏さんに、ボクは日頃から持ち歩いている万年筆付きの手帳を手渡した。

「いわゆる数字当てゲームってやつよ。今から私が書く数字を、貴方は降霊術を使って当ててみなさい。貴方が本当に霊能力者を使えるなら、これくらい出来るわね……？」

纏さんはボクの万年筆付き手帳をパラパラと捲って白紙があるか確認すると、それを机の上に置いた。

「ええ、勿論」

「じゃあ、始めるわね……」

纏さんはそう言うと、懐から携帯型の端末 クロスチェンジャーを取り出し、スイッチを押した。すると纏さんは突如閃光に包まれ、スーツにソフト帽といういつもの格好をした家綱が現れた。

「まあ、出番があっただけでもマシか」

家綱は溜め息を吐くと、ボクの手帳を開いて何か数字を書き込んだ。

「アイツの推理が正しければ、何でもいいよな」

そしてページが分かる様に端に小さく折り目を付けて手帳を閉じた。

「じゃあ、俺はこれで」

家綱はそれだけ言うと、再び閃光に包まれ 巫女服姿の纏さん

が現れた。

「さあ、当ててみなさい」

「……では」

そう言ってお茶を飲み始めた纏さんを前に神無月さんは再び目を光らせ、そして。

「……………!？」

悠々と饅頭を食べ始めた纏さんを見て、神無月さんは驚愕の表情を浮かべた。

「……………七、でしょうか」

神無月さんは一分間程、その光る両目で纏さんを睨み、睨み、睨んで答えを言ったが、先程までの余裕はすっかり失われており、若干目が泳いでいる。

「この後に及んでも諦めない根性は嫌いじゃないけど、答えは」

纏さんは机に置かれた手帳を手にとって家綱が折り目を付けたページを開き、そこに家綱が書いた数字『零』を神無月さんに見せた。

「残念。零点ね。彼にしては、なかなか洒落が効いているじゃない。纏さんはそう言うこと　意地の悪い笑みを浮かべた。

「ともかく、貴方は私の質問に答えられなかった。これが、貴方の降霊術が偽物であるという決定的な証拠よ」

「じゃあ、神無月さんは一体どうやって？」

「要するに、神無月さんの能力は」

ボクが纏さんに質問しようとした瞬間　纏さんが後ろに跳んだ。その直後、纏さんの前に置かれていた二つの食器が粉々に砕け散った。

「……………」

「全く、これだから男は嫌なのよ」

その原因は、突如立ち上がった神無月さんが放った踵落としかった。

神無月さんは右手でモノクル眼鏡を外し、それを燕尾服の内ポケット

トに収納すると、机を盾にして距離を取った纏さんを、その不気味に光る瞳で睨み付けた。

「まあ　口封じをしまえば問題ありませんか」

「　　っ！？　纏さん！？」

慌てて加勢しようとしたボクを、纏さんは右手で制した。

「由乃ちゃん。貴女は茉莉ちゃんを守ってなさい」

纏さんはそう言うと、そのまま懐に手を入れた。

「性別差もありますし、僕は二人掛かりでも構いませんけど？」

脅えている如月さんを連れ、小屋の入り口まで避難したボクを見て神無月さんは言った。

「あら、別に余裕ぶつてる訳じゃないわよ？　万が一にも由乃ちゃんと茉莉ちゃんが怪我しないようにと思ってよ」

「それはまた、随分と軽く見られたものですね。僕的能力に見当が付いているなら、そんな台詞は出ない筈ですけど」

そう言うと神無月さん　神無月は前髪を掻き上げ、ダラリと両手を垂らした。

「いや、貴方みたいな鬱陶しい能力者と私が戦う訳ないでしょう？

これはデリカシーの無い彼が二人を巻き込まないように　」

纏さんは懐からクロスチェンジャーを取り出して素早くボタンを押した。そして纏さんの服装が巫女服から何かに切り替わり　纏さんの身体を眩い閃光が包んだ。

「へえ……」

「家綱っ！」

光の中から現れたのは、ソフト帽にスーツ姿の家綱だった。

「その人格で、本当に良いんですか？」

神無月は理解出来ないという感じの表情を浮かべた。

剣術に長けた纏さん、投げ銭遣いの葛葉さんなど、家綱の人格はそれぞれ固有の高い戦闘技術を持っているものの、総合的な戦闘能力ではやはり家綱が頭一つ抜けている。そのため普段は表に出たがる事の多い他の人格達も、いざ戦闘となれば家綱に交代する事が多

いのだが、神無月は何を言っているのだろうか。それとも何か極端に苦手な特殊技能があるのだろうか。

「あんまり自惚れるなよ、三下執事。テメエの相手は俺だっ！」

家綱は壁を背後にしている神無月に向かって突進し、強烈な右フツクを放った。

神無月は僅かに後退してそれをかわすが、それは家綱のフェイントだ。神無月が家綱の右手に視界を奪われている所を突いた渾身の左アッパーが神無月の顎を襲った。

だが。

「狙いはなかなか。しかし、力不足は隠し切れませんね」

「なっ……！？」

神無月はまるで家綱の左アッパーを予想していたかのように、家綱の左拳を右掌底で受け止めていた。家綱の左拳が描いた軌道は、完全に死角になっていたはずなのに。

そして連撃を放った結果、前のめりになった家綱の顔面に、神無月が反撃気味に放った左拳が突き刺さった。家綱は咄嗟に後方へ跳んで威力を殺したものの、数メートル吹き飛んで背中から床に倒れてその場にソフト帽を落とした。

「家綱っ！？」

「くそっ……流石に読心術者相手に、あんな単純なフェイントは効かねえか」

家綱は神無月の左拳を受けた鼻を押さえながら、ゆっくりと立ち上がった。

「ど、読心術者！？」

その思いがけない真実を聞かされたボクは思わず叫んだ。

「ああ。要するにコイツは、人の心を読んでそいつには嘘だとバレない様な内容を適当に喋っていたって事だ。だから纏の奴が知らねえ手帳の数字は当てられなかったって訳だ」

「人間きが悪いですねえ。別に適当な事を言っていた訳ではないですよ？ その人が呼んだ人に掛けて欲しい甘い言葉を伝えていただ

けですよ？」

「ケツ、口の減らねえ奴だ。そんな奴は」

家綱は先程までボク達が座っていた椅子を両手で掴むと、それを腕力で無理矢理持ち上げて肩に担いだ。

「これでも喰らいやがれっ！」

走り込んで勢いを付けた家綱は、その勢いのままに神無月へ椅子を投げ付けた。

「全く、人の家を」

神無月は家綱が椅子を投げた瞬間に大きく右へ跳び、その一撃を難なく避けると一気に家綱の懐へと回り込んだ。

「勝手に壊してんじゃねーよ！」

そして神無月は家綱の顔面目掛けて、走り込んだ勢いで加速している強烈な右回し蹴りを放った。家綱は咄嗟に左腕を上げてそれを防ごうとしたが、必然的にガードが上がって空いた脇腹に突如軌道を変えた回し蹴りが入った。

「ぐ　　がっ　　」

脇腹に強烈な回し蹴りがまともに入った家綱は呻き声を上げた。

「家綱っ！」

それを見たボクは思わず悲鳴を上げた。これはかなり危険な入り方だ。下手をすれば内臓が破裂していてもおかしくない。

だが　　。

「捉えたぜ」

家綱の左腕が、神無月の右足を外側からしつかりと掴み取っていた。

「そんな滅茶苦茶な軌道の回し蹴りが入ったくらいで、俺を倒せると思っていたのか？」

「なっ！？　貴様、まさか　　」

家綱の真意を読み取った神無月が驚愕した。

「ああ。こういう　半端な一撃を待ってたんだよっ！」

家綱はそう叫ぶと、右足を掴まれて一步も動けない神無月の下へ

と踏み込み 体重の乗っていない神無月の拳を浴びながら強烈な右ストレートを叩き込んだ。

「が はっ!?!」

顔を正確に撃ち抜かれた神無月は後方へ数メートルに渡って吹き飛ぶと、そのまま勢いよく壁に叩きつけられた。

「へっ。攻撃つてのは、当てりやいってモンじゃないんだよ」

「……そうか。その力なら、このまま、隠して、いられるかもな……」

……

ゆっくりと歩み寄って来た家綱に向かって、床に頭から崩れ落ちた神無月はそれだけ吐き出す様に言うと、がっくりと意識を失った。

「……そんな事お前に言われなくても、そのつもりだ」

「家綱! 大丈夫!?!」

ボクと如月さんが家綱の下に駆け寄ると、家綱はボク達に背中を向けたまま眩い閃光に包まれていき 再び巫女服姿の纏さんが現れた。

「ええ、大丈夫よ……」

纏さんはそう言うと、僅かに疲れを滲ませた様な表情をこちらに向けてきた。

「ところで茉莉ちゃん。何か、お母さんの形見の品みたいな物を持ってないかしら?」

「……はい?」

「警察の人が来る前に、私が貴女のお母さんを降ろしてあげるわ」
降霊術。纏さんが真の霊能力者である所以を示す、死者の霊を呼び出してその身に降ろす事で交信を可能にする超能力だ。降ろす霊が生前何らかの強い想いを込めた道具が無ければ成功しないのだが……。

「そう、ですね。この財布は、私が生まれる前まで母が愛用していたという話を聞いた事がありますが……」

如月さんはポケットから相当の年代物らしき財布を取り出した。

纏さんはその財布を受け取ると、まるで何者かに祈るかの様にそ

れを両手で捧げ持ち、静かに瞳を閉じた。

「えっ？」

纏さんの身体から、突如仄かな光が放たれ始めた。ボクはその幻想的な姿が浮かび上がったのと同時に、纏さんの雰囲気徐徐に別人へと変わっていくのを感じた。

纏さんの降霊術が成功したのだと確信したボクは、すっかり気絶している神無月の身体を引き摺って小屋の外に出た。

生まれてから一度も会った記憶が無い母親との対面に、親を 家族を捨てて逃げ出したボクのような人間は不要だ。

「……………お母さん……………」

「……………」

自分の母親と邂逅し、すすり泣き始めたのだらう如月さんの声を聞きながら、ボクは一人地平線に沈みゆく夕日を 眺め始めた。

結局

神無月は詐欺罪で逮捕されたものの、不起訴処分になった。まあ占い師なんて大なり小なりそんなものだから、立件する方が無理だという話だそうだ。

後で聞いた話によると、神無月さんは両親から受け継いだあの古びた神社を再建する費用を稼ぐ為にあんな事をしていたらしく、今は近くのコンビニで働いている姿をよく見かける。ボクがコンビニを訪れた時に備えて、カロリーメイトは全味、全サイズを確実に用意しているとか。流石はコスプレ執事である。

一方如月さんというと、学校に通っていない為に同年代の知り合いが殆どいないボクにとって貴重な同い年の友人だ。そのうち胸の增量方法を聞き出したいのだが なかなか上手く切り出すタイミングを掴めないでいる。

そして最後に……………ボクが纏さんと神無月さんが最後に交わした会

話の意味を勘違いしていた事に気付いたのは、その翌日に訪れた亜人の男性。グラットンさんの事件が終わってからの事だった。

FILE・etc 「如月茉莉 後」(後書き)

ひとまずこれでこの話は終わりです。また、この作品の二次創作を書いて欲しいという声がありましたら、その時は喜んで書かせて頂きます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3040ba/>

【二次創作】七式探偵七重家綱・番外編

2012年1月14日02時46分発行